

MfG_J_Unchou_in_Uonuma_Saifuku-ji_temple



西福寺の石川雲蝶

Sep, 2024 by Kasuga

西福寺と開山堂

西福寺は、芳室祖春(ほうしつそしゅん)大和尚によって開かれ、約500年の歴史をもつ。本尊は阿弥陀如来三尊で、鎌倉時代の作。本来、曹洞宗では釈迦如来を本尊するが、西福寺は初め天台宗の寺であり、その後、本尊阿弥陀如来そのまま受け継いで曹洞宗に改宗し、800年以上護寺してきた。

開山堂は、初代住職をまつる堂のことで、西福寺では開山芳室祖春大和尚と曹洞宗の開祖である道元禪師が中央に、そしてその周りには歴代住職がまつられている。この開山堂を建立し、構図を決めて石川雲蝶に彫刻の装飾を施させたのが、第23代住職、蟠谷大龍(ばんおくだいりゅう)和尚で33歳の若い住職。嘉永5年(1852)起工、安政4年(1857)に完成した。しかし、歳の若い住職が貧しい農村地域に宗教性芸術性の高いお堂を作るにあたっては困難が多く、人々は様々な考えを持つなか、立派な開山堂が完成すると、地域の人々は喜ぶ一方で寺ばかりが贅沢をしているという心無い噂も広がった。大龍はそんな不穏な状況を自分が身を引くことで打開しようと考え、開山堂の落慶式(安政4年)に導師となることなく住職の座を退き、隠居として他寺へと移った。

蟠谷大龍和尚と雲蝶

大龍は、この雪深く貧しい農村地域の人々の心の拠り所となるお堂を建てたいという前住職の志を引き継ぎ、お釈迦様や道元様の教えこそが人々の心を豊かで幸せに導いて下さると信じて、是非この開山堂にも道元様の世界を再現したいと考えた。そこで、すでに三条に入り、本成寺や栃尾の貴渡神社に彫刻を施し活躍しているのうわさを知り、この魚沼に招き入れた。雲蝶39歳の時です。歳の近い二人はすぐに意気投合、開山堂にかける熱き仏道心を大龍様が語れば、雲蝶はその思いをよく理解し、彫刻という形にして見事に表現。

最初の作品である洪水を鎮める「仁王像」一対。

ついで、近隣の、何も楽しみのない貧しい生活に頑張っている住民に、何か慰めになれば、と開山堂全体を装飾する大彫刻群。

雲蝶にとってもこれだけの大きな仕事を一人でするのは初めてで、大龍の大きな信頼のもとに思う存分仕事をし、雲蝶の人生に大きな影響を与えた。

A large, detailed woodblock print illustration of a Buddhist deity, likely a wrathful figure, seated and surrounded by swirling clouds and other figures. The deity has a fierce expression, multiple arms holding various objects, and is adorned with elaborate jewelry and robes. The background is dark, emphasizing the central figure.





**越後日光
開山堂**

幕末の巨匠、 雲蝶の世界が今ここに蘇る。





左写真は開山堂。屋根は茅葺き二重葺。上部は入母屋造り、正堂は懸崖風向拝を有し、雲蝶の彫刻が施されています。

越後三山の麓、雪と稲穂の里、
魚沼の禪寺に旧き匠が遺した
素晴らしい彫刻があるのです。



拝観のご案内

- 拝観時間：9時～16時（最終受付15：40）
- 休 日：無休
- ※ 拝観時間・休日は、行事などにより変更あり、ホームページをご確認ください。
- 拝 観 料：大人500円、中学生・高校生（手帳提示）300円
小学生以下 無料（但し、小学生20名以上の団体は100円×人数）
※ 団体割引 20名以上1割引（小学生の団体は除く）

交通のご案内

- 上越新幹線：湯佐駅下車 タクシーで約10分
- JR上越線：（東京方面からは）湯佐駅下車 タクシーで約10分
（新潟方面からは）小出駅下車 タクシーで約15分
- お車の場合：関越自動車道小出インターから約5分
- バスの場合：虫野上下下車 徒歩で15分（南越後観光バス利用）



西福寺と開山堂

曹洞宗 赤城山西福寺は、室町時代後期一五三四年に開山芳手祖春大和尚によって開かれました。そして、その開山棟と曹洞宗の開祖元禪師様をおまつりする西福寺の開山堂は、江戸幕末一八五七年に、当山二十一世祖谷大龍和尚によって建てられました。



法堂裏の棟絵「乳室産龍之図」



横間造りし彫り「湯元禪師と白山大権現」

主要作品

幕末の木彫りの名匠・石川雲蝶の手になる、見事な「仁王像」、そして「道元禅師猛虎調伏之図」の大彫刻(右図)が魚沼・西福寺に納められました。
大彫刻の周りも、すごい彫刻の集まり(公式パンフ参照)。
その他、絵とまごうような組子障子、彫刻が多数。
(施主は方丈の大瀧和尚)



当初、旧山門にあった仁王像



当時の住職が、度重なる洪水に苦しむ民衆を何とか励まそうと、水害克服への祈りとともに作像を依頼したと記録に残っています。

仁王様をよく見ますと、金剛杵をもつ普通の仁王様ではありません。

阿形の仁王は、左手で邪鬼を抱え込み右足で邪鬼を踏みつけ、吽形の仁王は、左手で邪鬼の首を抑え込み右手も邪鬼の動きを制しています。まさに、民を苦しめる洪水の鎮圧を願い、災害に見立てた邪鬼を抑え込んでいるのです。

西福寺の新山門と新仁王像

仁王像はもともと旧山門にありましたが、山門の建て替えで、現在のように開山堂入口に移されました。新山門の建造にあたり、新仁王像を置くことになりまして、作者を長岡市中之島、杉之森の仏師・山本一成(桃楓)先生に依頼。現在の新山門と新仁王像のお姿で、お寺を護持しています。

この新仁王像については、製作中に中越沖地震に遭遇したとき、製作小屋で、梁から吊り下げた仁王様がぐるぐると舞ったという話が残っています。



「道元禅師猛虎調伏之図」は、越前国永平寺開山記の話に基づいている。

大龍和尚は、雲蝶に、この開山記の話を説明し、雲蝶は、イメージを膨らませたと思われる。



それにしても、日本語とは思えません

山道の御疲れ

とろりとろりと眠りつつ
前後も知らず見え給う
かかる所へいづくともなく
悪虎(あっこ)ひとつ跳び来たり
二人を目がけ、牙を鳴らし
只、一口と、飛びかかる
危うかりける次第なり

かかるところに不思議やな
道元の突き給う
柱杖、たちまち大蛇となり
悪虎を取って服(ぶく)せんと
竜虎、二つの戦い
凄まじかりける次第なり
時に道正の下げ給う
小刺刀(こさすが)、おのれと抜け出して
たちまち大の剣となり
虚空に駆けり飛びめぐり
山を崩して競り合いけり

この騒動に二人御目を覚まし
驚かせ給いつつ
御経を読誦なされ
観念しておわします
悪虎、なおなお怒りをなし
飛びかからんとせし所を
大蛇、悪虎がひら首に食らいつく
剣は虚空に飛び来たり
直中(ただなか)を刺し通す
大蛇は首を喰い切りたり
不思議や、かの剣
草むらに立ちければ
大蛇は剣の引きまとい(纏い)
飲むよと見えしが
元の柱杖となりにけり
剣と見えしは、刺刀(さすが)となり
元のようにぞ収まりける
俱利伽羅不動の御本地
この時より始まりける

越前国永平寺開山記には、『道元の突き給う柱杖、たちまち大蛇となり、道正の下げ給う小刺刀(こさすが)、おのれと抜け出して たちまち大の剣となり』とありますが、大彫刻では、道元の柱杖が大蛇、すなわち龍となるところだけが彫られていまして、道元が一人のお姿のように見えます。

もしかしたら、道正の小刺刀が変化した大剣も、どこかに隠れているかも知れません。

西福寺の雲蝶彫刻の意味するもの

旧山門	仁王像	洪水禍を鎮めるための祈願
開山堂	道元の図、 夥しい欄間彫刻	弘法とともに、苦しい生活の 住民に与楽の祈願 テーマパーク

西福寺の図も、よく見ますと、一番大きく描かれているのは「龍」です。長岡摂田屋、サフラン酒の創業者の吉澤仁太郎は、龍に特別の想いを持っていたようです。私も、単なる火防やお守りのみならず、仏法の守護、そして人々の心を豊かで幸せにという強い祈りが、鬼瓦をはじめ、龍、あるいは龍を暗示させる図像を屋敷内のあちことに配置したのでは、という側に立ちたいと思います。仁太郎の鰻絵の図も、雪深く貧しい農村地域の人々の心の拠り所として、「暗く重たい冬への反発」ではと、思いやりの心で表現される研究者がおられます(*1)。確かにそうです。屋敷の周囲に住む、日々の厳しい暮らしに生きる人々への、仁太郎の、心からの励ましと日頃の協力への感謝のように思えるのですが、如何でしょうか。

三寺院の彫り物の主題、目的(恐らく、というレベル)
依頼主により、少しずつ異なっている

本成寺

塔頭の向拝に見られる、寺院の荘厳
～そのほかに何か、あった筈

西福寺

住民の幸せを祈り、仏法をひろめよう
始めの仁王 洪水禍を鎮めるための祈願
道元の図 苦しい生活の住民に与楽の祈願

永林寺

お浄土を本堂に再現
始めの天女の浄土は、光長らに対する慰霊
本堂と廊下の境に龍や麒麟で仏を守護
～そのほかに何か、ある筈

頑張っている近隣の住民に、
『鰻絵』で、励ましと元気づけをしたい。
～ 魚沼・西福寺の巨大彫刻と同じでは

日頃から世話になっている仁太郎さんも、はたと気づいたと思うのです。
『みんな、いつも苦労しているなあ。頑張ってるなあ。
でも娯楽と云えるものは、なにひとつない。せめて皆がひと時でも
楽しめるようなものを、作ってあげたい。』



～ 共同体を守り、感謝する精神、今風にいえば、
「町づくり、村づくりの心」かも知れません。